

## 『源氏物語』とアーサー・ウェイリー

井原眞理子

アーサー・ウェイリーは、言うまでもなく『源氏物語』の西洋への紹介者として知られている。しかし、そのウェイリーの翻訳『源氏』がどのような底本に基づいているのか、どのような文献を利用して翻訳されたのかという事についてはあまり知られていない。ウェイリーが日本語と中国語をいかにして修得したのかという謎とともに、時には伝説に近い形を取って様々な説が書かれ、彼が与謝野等の現代語訳には目を通していなかったと言う通説さえもが形成されてきている。はたしてそうだったのであろうか。『源氏物語』という千年もの年月をかけ日本文化全体に亘り多様な形態に変化しつつ蓄積されてきた一つの大系が、アーサー・ウェイリーという人間と時代とにどのような形で交差し、具体的にいかなる手順、資料、方法によって訳されるに至ったのかを、英国で収集した資料を基礎に詳しく検討してみたい。

『源氏物語』は、それが執筆された、あるいはされつつあった当時から人々の関心と称賛を受け続けてきた。既に江戸時代までの時点で一万冊を超える注釈書、研究書等を生み出している。また、和歌、書道、絵画、演劇の他にも、さまざまな工芸美術の発展や形成に関わり、日本文学だけではなく日本文化全体を論じる上で重要な作品であるという事はあらためて指摘するまでもないであろう。

しかしながら、欧米のいわゆる親日家の間ではこの作品を手放しで称賛するという傾向はかつては存在しなかった。たとえば一八九九年に日本文学史を著したW.G.アストンは、『源氏物語』について「小説本来の目的」を実現しており、「疑うべくもない魅力」が存在すると述べる一方で、「よほどの親日家でない限り、紫式部をフィールディング、サッカレー、ヴィクトール・ユゴー、デュマ、セルヴァンテスと同等であるなどと言う事はないであろう。」と断り、「よほどの親日家」である自分の「過度の」源氏びいきに対する揶揄を予め牽制している<sup>1</sup>。また日本美術の救世主として知られるアーネスト・フェノロサも、その著書の中で藤原芸術を賛美する途中『源氏物語』に触れ、「現存のあらゆる民族の文学の中でも恐らく最も完璧に同時代の洗練された生活を描写している」が、「深い思慮を持った筋立て」

には欠けており、さらに別の箇所では「藤原時代の『物語』の絹づくめの貴族や貴婦人達のけだるい恍惚」と述べている<sup>2</sup>。あの法隆寺夢殿の百済観音を発見した驚きに匹敵するような衝撃は明らかに受けてはいない<sup>3</sup>。アーサー・ウェイリーがこれらの日本学の先達の業績を参考にしていた事は、和歌や謡曲の翻訳の参考文献として挙げている事からも知る事ができる。それらの影響を受けているウェイリーは、それではいかにして源氏と出会い、この長大で難解な原文を持つ物語を全訳しようとまで思い立ったのだろうか。

アーサー・デイヴィッド・ウェイリーは、一八八九年英国のタンブリッジ・ウェルズに裕福なユダヤ系の家庭の次男として生まれた。プルーストを英訳したスコット・モンクリーフは中学校以来の、フロイトを英訳したジェイムズ・ストレイチーは高校以来の、ともに友人である。パブリック・スクールの中でも特にスパルタ教育で知られるラグビー高校には、他にブルームズベリー・グループの画家ダンカン・グラント、詩人のルパート・ブルックなどがいた。ウェイリーはここで徹底的な古典語の訓練を受ける。十六歳で高校を卒業し、ケンブリッジ大学のキングズ・カレッジへ進み、ギリシャ・ラテン語を専攻した。当時のケンブリッジでは哲学者G.E.ムーアが、美意識、友情と倫理的生活との不可分を説き、後にブルームズベリー・グループと呼ばれる事になる若者達に深い影響を与えていた<sup>4</sup>。また、ブルームズベリー・グループのもう一人の学監、ゴールズワージー・ディキンソンは*Letters from John Chinaman*を執筆し、いわゆる 'Wisdom of the East' を象徴する架空の中国人ジョン・チャイナマンの目を通して当時の英国の工業優先主義と帝国主義を批判した<sup>5</sup>。このような雰囲気の中で学生達は既存の思想や概念にとらわれる事無く真理を追求する論理的訓練を受け、自分達をとりまく世界に対して一定の姿勢を共有してゆくことになった。その意味では確かにアーサー・ウェイリーはブルームズベリー・グループの一員であったと言えるであろう<sup>6</sup>。しかし、ウェイリーがしばしばブルームズベリー・グループに属するかどうか疑問視される原因として、このグループ自体が曖昧な性格を持っていたことに加え、彼が中心メンバーであるヴァージニア・ウルフやメイナード・ケインズの「オールド・ブルームズベリー」よりも六、七年後輩のジェイムズ・ストレイチーやフランシス・ビレルなどの第二世代に属していた事、一九一〇年代にはエズラ・パウンドとヴォーティシズムの詩人達やT.S.エリオット、そして、それ以後ではイディス・シットウェルのセサミ・クラブに集まる詩人達など、その交流の幅が広く、ブルームズベリー・グループを必ずしも中心としてはいなかった事が考えられる<sup>7</sup>。

また、ケンブリッジ時代のウェイリーは、ルパート・ブルックの主催していた「カルボナリー」という英詩におけるヴィクトリア朝脱出を唱える文芸クラブに所属し、

その同人誌にいくつか自作の詩を発表している。一九一九年に出版された第三番目の中国詩の翻訳集の中で、ウェイリーが自分の目的は翻訳よりもむしろ無韻詩の実験であったと主張している事からも、彼が新しい英詩の創造に関心を持っていた事が知られる<sup>8</sup>。もう一つのウェイリーの学生時代の関心事は、当時盛んになりつつあった社会主義運動であった。父のデイヴィッド・シュロスがその創設に関わっていたフェビアン協会の学生会員となり、一九〇八年の夏合宿にジェームズ・ストレイチャー、ルバート・ブルックとともに参加した事が記録されている<sup>9</sup>。

このように、ケンブリッジ時代のアーサー・ウェイリーは、当時の社会体制や既成概念から解放された新しい文学運動を起こそうと考えていた青年であった。

卒業試験を終えた一九一〇年頃、先天性の角膜異常の症状が現れ、学究生活を諦めた。一年ほど療養した後スペインへ行き、その間たまたま開いた大英博物館の副保管官の職に応募し Department of Prints and Drawings に勤務し始める。一九一二年に博物館に提出された書類には、フランス語、ドイツ語、スペイン語を自由に話し、イタリア語、オランダ語、ポルトガル語が理解でき、ラテン語、ギリシャ語が苦勞無く読め、ヘブライ語、サンスクリット語の知識もあると書かれており、卓越した語学力の一端を覗かせている<sup>10</sup>。

一九六二年に再販された *One Hundred and Seventy Chinese Poems* の序文の中で、ウェイリーは日本語と中国語を学びだした動機を説明して、大英博物館の東洋部の美術品を扱う際にそれらの言語を知らないで仕事をする事がきわめて困難であったため、二つの言語を同時に習い始めたと言っている<sup>11</sup>。つまり、アーサー・ウェイリーが日本語と中国語を学び始めたのは、大英博物館に就職したという偶然に依ったのである。

一九一四年十月十日付けの大英博物館の会議録には、苗字をシュロスからウェイリーに変える為の法的手続きを取った事が報告されている<sup>12</sup>。それは第一次世界大戦勃発後、目の障害のために兵役に就いていなかったアーサーが川辺で本を読んでいるところを警官に尋問され、シュロスというドイツ系の名前とともに、本に書かれていた奇妙な文字のためスパイ容疑を受けたためであった<sup>13</sup>。この陰鬱なエピソードから我々はウェイリーが大英博物館に就職した一九一三年六月から一九一四年十月頃までの間に日本語と中国語を学習し始めていたのを知る事ができる。

学習方法については、斉藤勇が比較的詳しく記録している。ウェイリーは独学とはいえ中国語も日本語もそれぞれの国の人に習った。日本語の教師は後の電気工学の大家、八木秀次だった。第一次大戦勃発当時ドイツに居た八木は、イギリスへ避難した。そして彼が『タイムズ』に出した語学交換教師の求人広告に応じたのがウェイリーだった。彼はいろいろな事を質問したが西鶴の文章などについても聞いたと

いう<sup>14</sup>。この記録からウェイリーが一九一四年頃、すなわち日本語を学び初めて間もない時点において、既に西鶴を読んでいた事が分かる。それは、アストンの文法書などを頼りに大英博物館で整理していた江戸時代の浮世絵や宋代の水墨画に添えられている詞書や画賛に、直接当たっていた結果ではないだろうか<sup>15</sup>。それらを解読する事がウェイリーの日本語と中国語の学習目的であったのだから、江戸時代の俳諧師、浮世草子作者の西鶴が最初に読まれた作家の一人であったとしても不自然ではない<sup>16</sup>。それは、仕事の必要上当然といえば当然の事であった<sup>17</sup>。それまでに出版された翻訳も参考に用いたであろう。そして、ウェイリーの最初の翻訳が中国語は漢詩であり、日本語は和歌であったというのも日本の絵巻物や浮世絵、中国の水墨画の性質上ごく自然の事として理解できるのである<sup>18</sup>。ハイゲイトの自宅で見つけた未出版原稿の中の *Translator* と題された自分の半生を語った講演用の原稿においてウェイリーは、初めて出会った中国の詩は中国の絵に添えられていたもので、中には驚くほど容易に意味が掴めるものがあった。数週間後にはかなり多くの詩を味わえるまでになったのでその楽しみを友人達と分かち合いたいと思い訳してみたという翻訳を始めた動機を語っている<sup>19</sup>。

『源氏物語』についてアーサー・ウェイリーが初めて触れているのは、一九二一年三月に出版された *The Nō Plays of Japan* である<sup>20</sup>。その百七十九頁の脚注により、少なくともこの時点で既に博文館版の『源氏』を参照していた事が分かる。さらに、一九二一年十二月十日の *The New Statesman* に掲載された “An Introspective Romance” という記事では、『源氏物語』について比較的詳しく論じている。その中でウェイリーは、詩において確実に翻訳可能な要素は中心となる構想、あるいは構築であり、イメージや想念の進行順序である。しかし和歌においてはそれらが発展する余裕がない。そこで日本の文学が文学として名誉挽回する余地の残されているのは散文である。たとえば『源氏物語』は、その中の数節がブルーストの小説に紛れ込んだとしても少しも不自然でなく、源氏はスタンダールの主人公のように内省的である、と述べている<sup>21</sup>。

すなわち、ウェイリーが『源氏物語』に見出だしていたのは、この作品がイメージや想念の見事な構築物であるという事と、その登場人物達の内省的奥深さであった<sup>22</sup>。しかし、一九二六年の翻訳『源氏』第二巻の序文においては、第一巻に対する書評があまりにも『源氏』の心理性に集中したのに反発してか、重要なのは心理面ではなく、むしろ紫式部の、緊張、弛緩、強弱の対照により事件や状況を際立たせていく手法であると述べ、たとえば「花宴」を取り巻く巻々は巧妙に選択された連鎖によって音楽的効果を生み出し、モーツァルトの交響曲のような優雅、均衡、抑制による古典美を形成しているとその様式美を強調している。また、紫式部の手

法と絵巻物との間には類似性があるとして、その形象とテンポに対する鋭い感覚を指摘している。

一方ウェイリーは、“An Introspective Romance”において源氏の本文についても言及している。即ち、本文が余りに古く異同が激しいため完璧な翻訳は不可能であるという事、また、数多くの概説書が存在するという事、そして、現在のところ唯一の適切な注釈書が絶版になってしまっているという事である。ここでウェイリーがどのような文献をテキストとして選択したかという事について考えてみたい。

一九六二年、七十三歳のウェイリーは、すでに自らの翻訳者としての人生は終了したとして、日本と中国関係の蔵書をロンドン大学の東洋図書館に寄贈した<sup>23</sup>。

ロンドン大学の School of Oriental and African Studies の図書館の受け入れ台帳には、一九六三年一月十日より始まるアーサー・ウェイリーからの寄贈書受付の記録がある。ここに登録されていた日本中国関係の書物は約二百冊である。各々の本の表紙の見返しに 'Presented to the Library of the School of Oriental and African Studies University of London by Dr. A. Waley' と記した寄贈符が張り付けてあるので確認できる。書き込みのある蔵書も多いが、紛失または行方不明になってしまっているものも少なくない。

ロンドン大学がすでに所持していた、或いは必要でないと判断した分は、当時東洋学部が新設される事になっていた北イングランドのダラム大学へ送られた。現在ダラム大学には G1369 という寄贈番号の付された書籍がやはり二百冊ほど保管されている。

一九六六年に米国のラットガーズ大学に買い上げられたアーサー・ウェイリー・コレクションには、東洋関係の書籍は約八十冊あった。大正初期に出版された富山房名著文庫を中心として、日本語の書籍が大多数を占めているが、著者贈呈などほとんど使用された形跡のないものが多い。このコレクションにはほかにウェイリーとベリル・デ・ゼーテ宛のブルームズベリー・グループの人々やシットウェル兄弟からの手紙、原稿などが含まれている。

残りがハイゲイトのウェイリー夫人宅のものである。中国日本関係で確認できたものは約七百冊である。他に洋書が数千冊ほぼ当時そのままの状態で保管されている。日本関係では、*The Nō Plays of Japan*, *The Tale of Genji*, *The Pillow-Book of Sei Shōnagon* の主要テキストなど、ウェイリーの使用した最も重要なものが残されていた。

以上千冊余りが私の確認しえたアーサー・ウェイリーの日本語・中国語関係の蔵書のすべてである。

この中から『源氏物語』関係の書籍を選び出し、出版年順に並べてみると文末の

表のようになる。ウェイリー自身は翻訳『源氏』第二巻において、『源氏物語』の本文には青表紙本系と河内本系の二種類があるが、河内本系で自分の手元にあるのは巻一と巻三十一のファクシミリのみである、と書いている。また、翻訳のために使用した主たるテキストは一九一四年の博文館版であるが他のものも随時利用した、とある<sup>24</sup>。さらに、一九三三年の最終巻の序文には、翻訳を始めた頃はまだ適切な注釈書が出揃っていなかった。第五巻と第六巻を翻訳するに際しては、青表紙本、河内本両方の本文を融合し、かつ、注の最も詳細な金子博士の本を使用した。他の良質な注釈書はまだ最初の数帖に留まっていると書いている<sup>25</sup>。

この二つの記述から分かる事は、ウェイリーは一九一一年に発見された河内本系の平瀬本の本文も参照したかったが、まだその本文が手に入らないのでとりあえず一九一四年に出版された博文館の池辺義象校訂『源氏物語』をテキストとして使用し、他のものも参照した。第五、六巻については『湖月抄』を底本に、河内本で本文を改訂した金子元臣の『定本源氏物語新解』（明治書院）を使用したという事である<sup>26</sup>。『定本源氏物語新解』の上巻は一九二五年に出版されているので一九二六年の翻訳第二巻には使用できた可能性もあるが、ウェイリーは翻訳を準備している段階ではまだ入手していなかったようである。また、金子の「玉鬘」から「御法」までの中巻が出るのが一九三〇年であるから、一九二七、二八年と続けて出していた翻訳第三、四巻に間に合わない。博文館本と交互に使用したのではテキストを混乱させる事になるので使用しなかったのであろう。また、すでに一九一六年に「花宴」の巻までは出版されていた『校訂源氏物語詳解』を使用しなかった事についても同様の理由が考えられる。

ウェイリーが『源氏』の翻訳を出版していた頃は、それまで紛失したと考えられていた河内本が発見され、青表紙本系の本文との融合が試みられていた時期であった。その後の研究により河内本が混淆本である事が分かり、現在では『定本源氏物語新解』を使用する人はいない。しかし、ウェイリー『源氏』が当時の日本における学会の動向をこのような形で反映していた事は特筆に値しよう。

ウェイリーと親交のあった美術史家の矢代幸雄は、ロンドンで知り合ったばかりの頃、すなわち一九二一年頃、彼が「常に『湖月抄』を持って歩き、時間があれば、それを丹念に読んでいて、いろいろと質問するので困らせられた記憶がある。」と書いている<sup>27</sup>。また、一九二三年十一月二十八日、大英博物館にウェイリーを訪ねた斉藤勇は、机の上に大阪積善館の『源氏物語湖月抄』が置いてあったと記録している<sup>28</sup>。つまり、ウェイリーは上記の二つのテキストの他に猪熊夏樹による『訂正増註源氏物語湖月抄』を携帯用として持ち歩いていた。

さらに、蔵書リストが示すごとく参考文献は他にも多数使用していた。この中で

使用された形跡のあるものは01, 02, 03, 06, 07, 08, 09である。01は書き込みがある事はあるがあまり使用されていない。02は第四巻を除いてよく使用されており、特に第一巻の「賢木」「須磨」の巻は目立って傷んでいる。第三巻では「夕霧」から「椎本」の巻におもに鈎括弧を振った書き込みがある<sup>29</sup>。梗概書の03は書き込みこそ無いが手沢本と呼べる程によく使い込まれている。最初の厳密な逐語訳である07は、二巻とも全体に渡り語句の意味、和歌の出典などの書き込みがある。08は青表紙本を底本とした本文のみの文庫本である。09も使用されているが、「絵合」から「若菜」の巻の翻訳が出たのが一九二六年から二八年であるから翻訳には使用されていない。

以上のうち02, 03, 08は小型のポケット版であるので積善館の『湖月抄』同様随時持ち歩き使用したのであろう。特に03は梗概書であるから初期の頃に物語の全体像を知るために使用したのではないだろうか。矢代幸雄は「ウェーレーの思い出」の中でウェイリーは現代語訳を使用していないと書いているが<sup>30</sup>01, 07に見るとおり確かに参照していた。ウェイリーの『源氏』の出版者であったサー・スタンリー・アンウィンは、ウェイリーの使用している原典は六巻だったと回想している<sup>30</sup>。参考文献中全六巻であるのは01と07である。生憎与謝野訳は第五巻のみ、吉沢訳は第五、六巻のみしか残っていないため断定はできないが、前半に使用しているテキストや参考文献がすべて一九一四年出版である事から、翻訳初期において一九一三年出版の与謝野訳を参照していた可能性はあるだろう<sup>31</sup>。また、01があまり使用された形跡が無いのは、一九二四年から刊行されたより正確な吉沢訳と重複しているため、後半は吉沢訳を主要な参考文献として使用し始めたからであろう。

それでは、ウェイリーはいつ頃から『源氏』を読み始めていたのだろうか。一九一四年といえば日本語を学習し始めた頃である。ダラム大学にある有朋堂文庫の出版年数は、一九一一年から一八年、ラットガーズ大学にある富山房名著文庫は一九〇三年から一九一五年である。また、*Nō Plays* の主要テキストの『謡曲評釈』は一九一一年から一六、『謡曲叢書』一九一四年、『狂言全集』一九一〇年である。これらの出版年から推測できる事は、ウェイリーは日本語を学び始めるともなく、つまり、一九一四年から遅くとも一六年頃までには日本から数種類の注釈書や全集を取り寄せ、浮世絵や水墨画の詞書を読む補助として使用し、興味を引かれたものから読んでいったのではないだろうか。

すなわち『源氏物語』も一九一〇年代後半に読み始め、一九二一年頃には本格的に読み出していた。そして、*Nō Plays* 翻訳の時点においてすでに博文館版の「空蟬」、  
「夕顔」の巻までは少なくとも読んでいた<sup>32</sup>。そして、一九二一年十二月の記事では、いつかこの作品を翻訳するつもりであると述べている。これは『源氏』の全体

像を把握していなければ言えない事なので少なくとも『忍草』は読み終わっていたのであろう。以下はウェイリーが原稿 *Translator* の中で『源氏』との出会いを述べた一説である。

'The first mention of *Genji* that I saw was in a work by Professor Chamberlain, who was at that time the greatest living authority in Japanese literature. He said that the book was so boring... But presently when registering some newly acquired Japanese prints I came across one that illustrated an episode in *Genji*. The prince, most unattractive and 19th century (it was a late and very ugly print) was standing by a rustic hut looking towards a curve of blue sea-shore. An inscription quoted what was evidently a phrase from the novel, "Although the sea was some way off, at night he would hear the lapping of the waves on the shore." Why that sentence should have made me feel that I wanted to read the book, I do not know. I went down at once to the shelves where the Japanese books were kept and found what was then one of the very few copies of *Genji* in Europe. The book dates from the 11th century, but it was not printed till 1654, and what the British Museum possesses is an extremely late and effaced copy of this first edition, printed from much worn woodblocks. It is in a form of ancient script and is extremely difficult to decipher and for practical reading purposes is valueless. I had to send to Japan for a modern, usable edition. It arrived just before I started on a ski-ing holiday. Between Victoria and Saanen-möser I read the first chapters. I have never had such an odd journey. So absorbed was I that the whole transit seemed like a dream. All the way to Paris I was utterly lost in *Genji* and had not after the Gare de Lyons, when lights were turned out and I could read no longer, the slightest recollection of how I had got on to the boat at Dover, on to the train at Calais or round the *ceinture* at Paris. As soon as it was light, I began reading again the death of Yugao — and suddenly we were at Montreuse.'

ここには明らかに長い時間のレンズを通して遠い過去を振り返った時に生じる誇張や、単純化の作用が存在し、当然文面通りに受け取る事はできないであろう。彼は、この運命的なスキー旅行へ出かける以前にすでにアストンの抜粋や、末松の翻訳を読んでいたのであろうし、一九一六年に出版されたパウンドの本を通して『須磨源氏』や『葵上』などの謡曲の源氏物の世界にももう触れていたかもしれない。そして何よりも、大英博物館の屏風絵、絵巻、浮世絵などの源氏絵の伝統から『源氏



物語』の世界の香気に知らず知らずの内に接していたはずである。しかし、この一節が我々に提示している最も重要な事は、『源氏物語』の原典との出会いこそがいかに決定的であり、圧倒的な力を持っていたかと言う事なのではないだろうか。ウェイリーは、何よりもその文自体の持つ魔力に引きつけられていった。それは血沸き肉躍る筋立てでもなければ、平安時代をそのままに再現する写実の世界でもなく、あるいは、登場人物の鋭い心理学的解剖でもなく、詩人の耳と想像力のみが感受する事のできた音と音との衝突と共鳴、単語と単語の対照と融合、周到に用意された意味の連鎖と、出来事の繰り返しと変奏により連綿と織りなされてゆく完璧な散文詩、永遠に続くかと思われる長い長い言葉の魔術の世界だった。翻訳『源氏』の第一巻の内表紙に控えめに添えられた碑文は、シャルル・ペローの童話『眠れる森の美女』における目覚めた王女からの王子への開口第一声である。‘Vous vous êtes bien fait attendre!’ かくしてアーサー・ウェイリーは、千年の塵の積もった本の扉を開き、フェノロサが夢殿の錆び付いた鍵を回し、布にくるまった観音像の真の姿を目にした時の驚愕に勝るとも劣らぬ発見をした。それは、イスタンブールから東へも、ジブラルタルから西へ一歩も歩を進める事の無かった書斎の冒険家ウェイリーの偉業であり、爾来未知の海に眠っていた東洋の古典は、イギリスの文学に受け継がれてゆく遺産として定着した。

## 註

1. W. G. Aston, *A History of Japanese Literature* (London: Heinemann, 1899), 96-98.
2. Ernest Fenollosa, *Epochs of Chinese and Japanese Art*, Vol. 1 (London: Heinemann, 1912), 154-55, 181.
3. *ibid.*, 50-51.
4. G. E. Moore の *Principia Ethica* (Cambridge: Cambridge University Press, 1903) はブルームズベリー・グループの福音書と言われた。(cf. “The Air of Bloomsbury,” *Times Literary Supplement*, 20 August 1954, 521-23.)
5. Goldsworthy Lowes Dickinson, *Letters from John Chinaman* (London: R. Brimley Johnson 1902.)
6. ウェイリーは、第二次世界大戦中に学生時代を懐かしみ、メイナード・ケインズ、フランシス・ピレル、ロジャー・フライ、パートランド・ラッセル等と際限無く続けられた討論について書いている。“Intellectual Conversation,” *Abinger Chronicle* (Dorking, Sussex), IV, 4, (August–September 1943.)
7. 現にウェイリーの名は、ヴァージニア・ウルフの手紙や日記よりもジェイムズ・ストレイチャー夫妻や、シットウェル兄弟に関する記録により多く見られる。
8. Arthur Waley, *More Translations from the Chinese* (London: Allen & Unwin, 1919), 6.

9. Norman and Jeanne Mackenzie, eds., *The Diary of Beatrice Webb*, Vol. 3 (Cambridge: Harvard University Press, 1983), 98.
10. "British Museum Application of Arthur David Schloss for the situation of assistant," ADS, 28 March 1912, Archives Office, The British Museum, London.
11. Arthur Waley, *One Hundred and Seventy Chinese Poems* (London: Constable, 1962), 5.
12. Standing Committee, "Minutes of Committees," 10 October 1914, Archives Office, The British Museum, London.
13. "Obituary," *Kings College Annual Report* (Cambridge, England), (November 1966) : 19.
14. 齊藤勇「Arthur Waley を悼む」『英語青年』一九六六年九月一日号、五百九十四～五百九十五頁。
15. ウェイリーは W. G. Aston, *A Grammar of the Japanese Written Language, with a Short Chrestomathy* 2nd ed. (London: Phoenix, 1877) を, *Japanese Poetry: The Uta* (Clarendon, 1919) に日本語学習のための参考書として挙げている。
16. ラットガーズ大学に保管されている従妹のマーガレット・ウェイリーの回想録には, 'Arthur first took up these fresh languages because he wanted to understand the content and literary background of the pictures in his care but soon he was fascinated by the literatures themselves which he studied with intense concentration.' と書かれている。(Margaret Waley, "Arthur David Waley 1889-1966: A View from within His Family," AMsS, June 1968, Special Collections, Alexander Library, Rutgers University, Rutgers, 15. )
17. L. Binyon, comp., *A Catalogue of Japanese and Chinese Woodcuts Preserved in the Sub-Department of Oriental Prints and Drawings in the British Museum* (London: British Museum, 1916) には, 細田栄之の『風流やつし源氏』, 歌川国貞の『源氏五十四帖』などが記載されている。浮世絵に添えられた和歌の訳には脚韻のあるものと無いものがあるが, 恐らく前者はビニヨン, 後者はウェイリーによるのではないだろうか。また, 六十一頁において春重と司馬江漢は別人ではないかと疑問を投げかける説明文は, 一九二八年の "Shiba Kokan and Harusige not Identical," *Burlington Magazine* (April 1928) : 178. へとつながると考えられ, 既にウェイリーらしい文体も見せている。一九一六年三月付けの前書きには Mr. S. Nishigori, Mr. S. Takaishi, Mr. H. Inada の援助を得たとある。ウェイリーはこの三人からも中国, 日本美術, 和歌, 漢詩への手ほどきを受けたであろう。しかしながら, 当時副保管官であったウェイリーの名前は挙げられていない。
18. 'The first Chinese poems I read were those inscribed on paintings, just as my first introduction to *The Tale of Genji* was an extract inscribed on a Japanese print.' (Waley, 170, 1962, 5.)
19. 同様の記述が Waley, 170, 1962, 5. にもある。また, この原稿は, *The Real Tripitaka* を最新の翻訳としてあげているので, 一九五二年から一九五五年の間に書かれている。
20. 拙論「アーサー・ウェイリーの謡曲翻訳—『葵上』を中心に—」『文学研究論集』第一号, 筑波大学文学研究会, 一九八四年, 七十八～七十九頁。

21. Waley, "An Introspective Romance," *The New Statesman* (10 December 1921): 286-87.
22. エイドリアン・ピニン-tonはウェイリーの源氏解釈とブルームズベリー・グループの美術評論家ロジャー・フライやクライブ・ベルの美意識との関連を指摘している。(Adrian Pinnington, "Arthur Waley, Bloomsbury Aesthetics and *The Tale of Genji*," *Ferris Studies*, No.23 (March 1988.)) 一方、その心理学的傾向に関しては、アーサー・ウェイリーの精神分析に対する関心はさまざまな箇所に見受けられ、たとえば最終巻の序文において 'I realize that it is in general a mistake to submit an author to amateur efforts towards psycho-analysis.' (Waley, *The Bridge of Dreams* (London: Allen & Unwin, 1933), 15.) と述べている事からも逆説的に窺える。それは、一九二〇年代からフロイトを英語圏へ紹介し始めたジェイムズ・ストレイチーがウェイリーの高校時代からの友人であり、ブルームズベリーの隣人同士として交流を続けていた事、またブルームズベリー自体が精神分析の最先端であったため否応なしにその影響下にあったためであろう。本人の否定にも関わらず、確かに心理学的興味は存在しているのである。すなわち、少なくとも初期の段階においてはウェイリーの源氏評価はまずその構築の周到さと心理的洞察の深さにあったと言う事ができるであろう。cf. Perry Meisel & Walter Kendrick, ed., *Bloomsbury/Freud: The Letters of James and Alix Strachey 1924-25* (London: Chatto & Windus, 1986.) Marian Ury, "The Imaginary Kingdom and the Translator's Art: Notes on Re-reading Waley's *Genji*," *Journal of Japanese Studies*, Vol. 2, No. 2 (Summer 1976): 282.
23. ロンドン大学の方針により、長年住み慣れたブルームズベリーのフラットから立ち退かねばならなくなった事とともに、最愛の友人であり、良き人生の伴侶でもあった舞踊研究家のベリル・デ・ゼーテの死がその理由として考えられる。
24. Waley, *The Sacred Tree* (London: Allen & Unwin, 1926), 35-36.
25. Waley, *Bridge*, 24.
26. 最初の数帖に留まっている注釈書とは河内本を校訂に加え一九一六年から刊行を始めた池辺義象、鎌田正憲の『校訂源氏物語詳解』(博文館)の事であろう。これは第五冊『花宴』までで途絶えてしまった。
27. 矢代幸雄「ウェーリーの思い出」『国際文化』147, 一九六六年九月, 十一頁。
28. 斉藤勇「Arthur Waley を悼む」『英語青年』一九六六年九月号, 五百九十四頁。
29. 「夕霧」から「椎本」までは翻訳の第四巻後半より第五巻の始めにあたる。第四巻は一九二八年五月に、第五巻は一九三二年六月に出版されており、約四年もの隔たりがある。また、第三巻は一九二七年二月出版であるから、第四巻が準備されたのは一九二七年の春頃から一九二八年の初めにかけてという事になる。ウェイリーは、一九二七年の秋にベリル・デ・ゼーテとともにイスタンブールへ六週間の旅行に出掛けている。(Margaret Waley, 18-19.) 彼はこの有朋堂の第三巻を携えて旅行中の空白の埋め合わせをしたのではないだろうか。この事は「夕霧」の直前の巻がウェイリーが削除した「鈴虫」である事から興味深い問題を提示しているように思われる。即ちウェイリーはこの時点ですでに「鈴虫」の巻削除を明確に意図していたという事である。

30. Sir Stanley Unwin, *The Truth about a Publisher* (London: Allen & Unwin, 1960), 193. 一方、ウェイリーがよく持ち歩いていた積善館版『湖月抄』は全八巻であったので、アンウィンがウェイリーの翻訳『源氏』全六巻と混同した記憶違いの可能性もある。
31. しかし、積善館版『湖月抄』同様、与謝野訳もウェイリー『源氏』への顕著な影響は見られない。ウェイリー自身が述べているように、前半の主要テキストはあくまで博文館『源氏』であった。
32. cf. 拙論、前掲。

アーサー・ウェイリー蔵書『源氏物語』関係 出版年順

SOAS School of Oriental and African Studies Library, Univ. of London  
 DRM Oriental Library, University of Durham  
 RG Special Collection, Alexander Library, Rutgers University  
 HG Arthur Waley's house in Highgate

T 主要文献として使用  
 R 参考文献として使用  
 U 書き込みはないが頻繁に使用した形跡がある  
 NC 図書館の受け入れ表にはあるが登録されていない  
 P 著者贈呈  
 \*\* 書き込み多  
 ・ 書き込み少

01 SOAS DB 913.26 121640

與謝野晶子

『新譯源氏ものがたり』下巻の一（御法～宿木）

金尾文淵堂

一九一三年

・（目次に帖の番号）

02 DRM PLJ 409 o/58,654-772

武笠三 校訂

『源氏物語』一、二、三、四巻有朋堂文庫

有朋堂書店

一九一四年（非賣品）

R（一）・特に賢木、須磨 U（二）U（三）\*\*特に夕霧～椎本（四）・

03

RG Arthur Waley Collection

北村湖春 著 関根正直 校訂  
『源氏物語忍草』 富山房名著文庫  
富山房  
一九一四年  
U

04

DRM PLJ 409 o/654-772

塚本哲三 校訂  
『修紫田舎源氏』 上・下巻 有朋堂文庫  
有朋堂書店  
一九一五年

05

SOAS 121669

島津久基  
『平瀬本 源氏物語』（線装本）三冊  
京都大学文学部発行  
一九二一年  
NC 「桐壺」「権本」 ファクシミリ  
Arthur Waley, *The Sacred Tree*, Allen & Unwin, 1926, p.35-6.

06

HG

金子元臣  
『定本源氏物語新解』 全三巻 上・中・下  
明治書院  
一九二五・一九三〇・一九三〇年  
T (上)・(下) ..

07

DRM PLJ 444 o/58,976-77

吉澤義則 訳  
『源氏物語』 宇治十帖 上・下, 全譯王朝文學叢書 八, 九巻  
王朝文學叢書  
一九二七年  
R ..

08

DRM PLJ 444 o/589,139-40

島津久基 校訂

『源氏物語』一，三卷 岩波文庫 350-351, 354-355

岩波書店

一九三〇-三一年

U

09

DRM PLJ 444 o/58,001

梅澤精一

『源氏物語（校註）』自繪合の卷至若菜（下の巻き）

有宏社

一九三〇年

U

10

SOAS DB 193.36 121668

島津久基

『対訳 源氏物語講話』

中興館

一九三一年

「桐壺」，「帶木」

11

HG

藤田徳太郎

『源氏物語研究書目要覧』

六文館

一九三二年

12

HG

長谷川誠治 改書印刷

*Genji Monogatari*, II, III

弘前：同文会

一九三四年（非売品）

Romanized text of *Genji*

13

DRM PLJ 444 o/58,025

小林榮子

『源氏伊勢物語新研究』

晋文館

一九三五年

- 14 SOAS DB 913.3 121710  
小林榮子  
『源氏伊勢物語新研究』  
晋文館  
一九三五年
- 15 DRM PLJ 444 o/59,137  
谷崎潤一郎 訳  
『源氏物語』愛蔵本限定非賣品 卷十  
中央公論社  
一九三九年
- 16 RG Arthur Waley Collection  
谷崎潤一郎 訳  
『源氏物語』愛蔵本限定非賣品 卷一一九・十一一十八  
中央公論社  
一九三九年（一一九・十一一十四）一九四〇年（一五一一八）
- 17 RG Arthur Waley Collection  
谷崎潤一郎  
『新訳源氏物語』第一一八・十一一十二  
中央公論社  
一九五一年  
P
- 18 SOAS DB 913.36 121642  
北山谿太  
『源氏物語の語法』  
刀江書院  
一九五一年
- 19 DRM PLJ 444 o/58,027  
北山谿太  
『源氏物語の新研究』  
立志社書房  
一九五一年  
P

- 20 HG  
池田龜鑑  
『新講源氏物語』上巻  
至文堂  
一九五一年  
P
- 21 RG Arthur Waley Collection  
新藤兼人 監督  
『大映創立十周年記念映画（昭和二十六年度芸術祭参加作品）源氏物語』  
大映株式会社  
一九五一年  
パンフレット
- 22 HG  
北山谿太  
『源氏物語事典』全一卷  
平凡社  
一九五七年
- 23 HG  
五十嵐力  
『源氏物語』昭和完譯  
五十嵐力博士『昭和完譯源氏物語』刊行会  
一九五九年  
限定950部中 第649号
- 24 HG  
曾根豊祐  
『源氏物語女性群像 第一巻 浮舟』  
源氏物語女性群像刊行会  
一九六三年  
P
- 25 HG  
岡一男  
『源氏物語事典』



春秋社

一九六四年

26

HG

曾根豊祐

『源氏物語女性群像 第二巻 尼の浮舟』

源氏物語女性群像刊行会

一九六四年

P

27

HG

丸山キヨ子

『源氏物語と白氏文集』東京女子大学学会研究叢書 3

東京女子大学学会

一九六四年

P

28

SOAS DB 913.36 121651

松風閣主人 編註

『新編紫史』巻七～十

誠之堂

n. d.

ウェイリーが使用したと分かっているが紛失しているもの

29

猪熊夏樹

『訂正増註 源氏物語湖月抄』全八巻

大阪積善館

一八九一年

R

斉藤勇「Arthur Waley を悼む」『英語青年』Sept. 1966, p.594.

30

池辺義象 校注

『源氏物語』国文叢書第一, 二冊

博文館

一九一四年

T

Arthur Waley, *The Nô Plays of Japan*, Allen & Unwin, 1921, p.179.

AW, *Sacred Tree*, Allen & Unwin, 1926, p.36.

31

池辺義象 校注

『竹取物語・伊勢物語・落窪物語・土佐日記・枕草子・紫式部日記』国文叢書第十冊  
博文館

(一九一四年?)

T

AW, *A Wreath of Cloud*, Allen & Unwin, 1927, p.15.